心を寄せて　一手一つに

教祖百四十年祭

立教187年1月1日　厳かに元旦祭が勤められた

真明

発行所
天理教芦津大教会
〒546－0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話　06（6702）1980
FAX　06（6700）1854
Eメール　shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所　天理時報社

さあ〳〵どんな物動かすも、持って歩くも、大勢の力で自由自在、皆心の揃うたが自由自在。こちらが動いても、こちらが動かんというようでは、自由やない。

明治25年6月18日

昨年1月25日より、大教会でお願いづとめが始まりました。祭文では身上、事情の方のお名前を一人ずつ読み上げ、十二下りのてをどりを添え、毎日たすけ心をいっぱいに勤めていますが、昨年12月末までに大教会に寄せられた1年間のおたすけの願い出は、延べ4万9千391名にも上りました。この数字は、日々おたすけに勇む、多くの教会長、ようぼくの「たすけ心」という誠真実の積み重ねです。

一人ひとりは、やるべきことも、できることも、立場や置かれている状況によって違うでしょう。しかし、私たちには全国各地に、また遠く離れた海外にもたくさんの教友がいます。志を同じくする多くの仲間がぢばに、親元に心を一つに寄せることで、大きな力、勇気、勇み心を生み出します。

教祖がお教えくだされた陽気ぐらしへの道は、この道を通る仲間と心を一つにたすけ合い、勇ませ合いながら進めていくものです。

年祭活動2年目がスタートしました。道を通るお互いが励まし合い、勇ませ合って、昨年より充実した年を歩ませていただきましょう。

四方正面

友人に神様の話をしたら「神様が本当にいるなら、すぐに陽気ぐらしの世の中にしてくれたらいいのに」と言われたことがある。もちろん親神様は、明日にでも陽気ぐらしの世の中を作ることができる。そうされないのは、成人の足りない私たちが陽気ぐらし世界を与えられても、瞬く間に壊してしまい、自分たちの力で元に戻すことができないからだ。永い年月をかけ、神様から与えられた知恵と力を使い、さまざまな節をたすけ合いながら乗り越えて到達した陽気ぐらし世界なら、もしどこかにほころびができても、自分たちで修復もできるだろう。

世界にはさまざまな問題があるが、それに振り回されることなく、これは陽気ぐらしに向かうために人類に与えられた必要な節だと、今与えられる時旬の御用に専念したい。

（庄）

《立教186年12月月次祭　挨拶》

教祖に信頼していただけるよう教えの実行実践を

大教会長　井筒梅夫

皆さん方にはこの一年、年祭活動三年千日の1年目として、時旬の御用にご丹精をいただき、誠にご苦労様でした。今日もこの寒さ厳しい中、また年の瀬の忙しいところを大教会にご参拝いただき、共々に月次祭を陽気に勇んで勤めさせていただきましたことは、大変ありがたいことです。

私は年末の時期にいつも思いを致すことがあります。それは『教祖伝』に記されている、ある年の秀司先生と飯降伊蔵様のやり取りです。これまでも何度かこの逸話を取り上げましたが、今年も改めて思いを致したいと思います。

飯降先生は教祖に奥さんをたすけていただいてからは、誠真実の心でお屋敷につとめられ、教祖にお仕えなされた先人です。お道では「伏せ込み」という言葉をよく使いますが、おさしづに出てくる伏せ込みという文言のほとんどが、飯降先生のお屋敷へつとめられたことを示しています。つまり、飯降先生のつとめぶりが伏せ込みの原点であって、道を通る者のお手本です。その飯降先生が最も苦労をされ、そして大きな働きをされたのが、つとめ場所の普請と大和（おやまと）神社事件の節からの向こう9年間の時期だと思います。

元治元年の9月に始まったつとめ場所の普請は、10月26日に棟上げを滞りなく終えましたが、その翌日に山中忠七先生がお祝いに関係者を自宅へ招かれました。この時、教祖は、「**行く道すがら神前を通る時には、拝をするように。**」と仰られたので、一行は大和神社の前で鳴物を入れて大いに勇んでおつとめをつとめられたのです。ところがその日、大和神社では大切なご祈祷中であったことから、一同は3日間留め置かれ、多額の罰金過料を支払わされました。これが大和神社事件の節です。

これによって、当時信仰していた人々は、教祖の仰せに従ったのに、なぜこんな目に遭うのかと、信仰に疑問を持つ者や恐れをなす者まで出てきて、道から離れていったのです。

このように皆が道から離れていく中で、ただ一人残られたのが飯降先生です。止まっていたつとめ場所の普請も、飯降先生お一人で内造りを進められ、残った借金もコツコツと返済をしてゆかれました。こうしてお屋敷に一人つとめきられたのです。おさしづに、

年々大晦日（おおつごもり）という。その日の心、一日の日誰も出て来る者も無かった。頼りになる者無かった。九年の間というものは大工が出て、何も万事取り締まりて、よう〳〵随（つ）いて来てくれたと喜んだ日ある。　明治34年5月25日

と述べられています。大和神社の節以降、離れていった人々は一人二人と戻っては来られましたが、この節から9年の間、お屋敷につとめきられたのは飯降伊蔵先生お一人でした。これを教祖が大層喜ばれたご様子をこのおさしづから拝することができます。そして、このおさしづは、

これ放って置かるか、放って置けるか。それより万事委せると言うたる。そこで、大工に委せると言うたる。　同前

と続きます。このように親神様も教祖も、飯降先生に厚い信頼を寄せておられたのです。もちろん秀司先生やこかん様など教祖のご家族も頼りにしておられたのは言うまでもありません。

最初にお話しした秀司先生と飯降先生のやり取りは、この大和神社事件があった元治元年の年の暮れの出来事です。12月26日のおつとめを勤め終えて飯降先生が自宅のある櫟本村へ帰るとき、秀司先生が「お前がいんでしまうとあとはどうすることもできん」と仰せられました。すると飯降先生は、「すぐにまた引き返してきますから」とお応えになって、自宅の年末の所用を済ませて、翌27日にお屋敷に戻って、つとめ場所の借財の後始末に奔走されたのです。

飯降先生を心から信頼された秀司先生、秀司先生の信頼にそのまま応えられた飯降先生、ここに道の親と子の素晴らしい絆を感じるのは私一人ではないと思います。この元治元年の年の暮れの逸話を拝することで、来年こそは教祖により信頼していただける信仰者にならせていただきたいと心を引き締めさせていただくのです。

年が明ければ年祭活動2年目を迎えます。お互いに一人ひとりが教祖に今より少しでも信頼をしていただけるように、教祖に教えていただいた教えの実行実践に勇んで励み働かせていただきたいと思います。教祖に御安心いただき、お喜びいただけるような成人を誓い合って、年祭活動2年目に臨ませていただきましょう。

（要約）

立教百八十六年　十二月月次祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様の果てしなき御守護と深く篤き親心にお導き頂きまして、日々恙なく成人の道をお連れ通り下さいます中に、今日は早くも立教百八十六年の納めの月次祭を勤める日柄となりました。

思い返せば今年は、教祖百四十年祭活動の第一年目として、諭達第四号の精神を信心の拠り所に、御存命の教祖にお喜び頂ける成人を誓って、三年千日を踏み出させて頂きました。そして信仰実践に動くということを目標に掲げて、届かぬながらもお互いに勇ませ合い励まし合いながら、たすけ一条の実動に努め、心の成人に励んでまいりました。勇んだ年祭活動を勤めさせて頂きたいと、仕切って時旬の道を歩んでまいりましたが、遅々たる歩みにてまだまだお目だるいところを、おおらかな御心にお抱え頂き、日に月に、数々の結構を頂戴して、今年も恙なくお連れ通り下さいました言い尽くせぬ御厚恩の程は、思えば誠に有難く勿体なき極みでございます。お許しを頂きました今日の吉日に、役目にあずかる者一同、心を揃え、座りづとめ、陽気てをどりを勇んで勤めて、十二月の月次祭を執り行わせて頂きます。

御前には年の瀬も厭わず参らせて頂きました芦津の道の子達が、共にこの一年に賜りました親心溢れる御恵みとお導きに心より御礼申し上げ、おうたを唱和してつとめに勇む状を御照覧下さいまして、親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます。

私共をはじめ、芦津に繋がる数会長、ようぼく一同は、たすけの旬・成人の旬を安閑と過ごすことなく、年祭活動二年目を喜び心と勇み心を以て更に実動に拍車をかけ、只管たすけ一条に励ませて頂きまして、教祖にお受け取り頂ける道の歩みを一手一つに進ませて頂く決心でございます。

何卒、親神様には一同の誠真実をお受け取り下さいまして、教祖年祭の理の追い風を頂いて、稔りある年祭活動を御守護下さり、陽気ぐらし世界へとお連れ通り下さいますよう御願い申し上げます。

茲に立教百八十六年納めの月次祭に当たり、今年一年にお掛け下さいました厚き親心に重ねて御礼申し上げ、併せて来年も変わりなくお連れ通り下さいますよう、一同と共に慎んで御願い申し上げます。

《立教186年12月月次祭　神殿講話》

おたすけのできるようぼくを一人でも多く丹精しよう

役員　加世田　洋

年祭活動への追い風

３年以上続いた新型コロナウイルス感染拡大という世界規模の大きな節も次第に収束の御守護を頂き、以前の生活が少しずつ戻ってきました。この節から良い芽を出していくためには、世の中の多くの人々が心の成人へ向けて努力を重ねていくことが大切であり、それは現在、私たちが三年千日と仕切って取り組んでいる、教祖年祭に向けての活動の延長線上にあると思います。

今年は、おぢばにおける行事も次々と再開され、４年ぶりに開催された「こどもおぢばがえり」には11万余の方がおぢばに帰られました。また「学生生徒修養会」や、各会における総会も元の形で開催され、会活動を通しての動きも戻ってきました。

人材育成の上に、とりわけ若年層育成の上に、おぢばでの行事の大切さを改めて感じた一年でした。年祭活動１年目にこうした方向へと風向きが変わってきたことを思うと、親神様・教祖が私たちに追い風を与えてくださっていると思わずにおれません。

教祖の年祭をつとめる意義は、どんなに時代が流れ、顔ぶれが変わっても変わりません。教祖が25年先の定命を縮めて現身をお隠しになられ、御存命の理をもって、今もなお私たちをお導きくださっている親心を再確認し、御存命の教祖にお喜びいただけるよう、一手一つに世界たすけに邁進し、陽気ぐらしへと大きく進む旬です。

親の理を受けて

大教会では毎年、全教会へ巡教を実施していますが、コロナ禍により巡教を受けることが困難な状況が続きました。今年より世間的にも動ける状態になるのと同時に、諭達の精神徹底を図る上から、全教会一斉巡教が実施されました。

ある部内教会でのお話で「今年は大教会として『動く』ということを目標にしています。自分にできること、心に決めたことを何からでも実行させていただきましょう」と聞いた女性ようぼくは、所属教会が数年前にご本部にお戻りになり、それからは上級から声もかかっていましたが、なかなか参拝できていませんでした。

しかし巡教でのお話を受け、改めて今自分にできることは教会へ足を運ぶことだと思い直し、上級の朝づとめに日参することを心に定め動き始めました。日参し、教友の方々と会話をする中に勇み心が湧き、最近では月次祭に自分の手作りのお菓子をお供えすることも実行してくれています。

おさしづに、

何でも親という理戴くなら、いつも同じ晴天と諭し置こう。

明治28年10月24日

とあります。親の声を我が事として受け止め動く中に、親神様より勇み心を頂戴できたのです。諭達においても、

よふぼくは、進んで教会に足を運び、日頃からひのきしんに励み、家庭や職場など身近なところから、にをいがけを心掛けよう。

とあります。ようぼく一人ひとりは、拠り所である教会へ足を運び、日々ひのきしんの態度をもって身近なところからお道の良い匂いを映していきたいものです。

真にたすかる道へ

年祭活動は、たすかる旬とお聞かせいただきますが、思いもよらぬ身上、事情をお見せいただくこともあります。ある男性ようぼく

は、今年6月、お腹が痛むので、病院で診てもらうと、リンパ腫と診断されました。

腫瘍の一部を摘出した後、説明があり「腫瘍の周りには動脈や臓器が近くにあり、手術で全部を摘出することはできないので、抗がん剤治療をしていきます」とのことでした。布教所長である弟をはじめ、兄弟親族一同は何とか助かってもらいたいと、お願いづとめでたすかりを願うと共にそれぞれが教会への日参や、できることに動き出しました。

投薬治療が始まった直後、医者から「今の状態だと、次に家族へ連絡するときは最悪のときかもしれません」と告げられ、布教所長は急遽、おぢばへと足を運び、月次祭を参拝、教祖の御前にて「どうか兄をお道の御用にお使い下さい」とお願いされました。おつとめ後神殿講話に立たれた本部員・飯降力先生はお話の中で、

私たちは、人生の歩みのなかで必ず、思いもよらぬ病気やけがといった身上あるいは困難な事情に遭遇します。（中略）けれども、この道を信仰する者ならば、それを節と受け止め、心を倒さず、自らを励まして前を向いて歩こうと努力するだろうと思います。

なぜ、そのような考え方や行動ができるのか。それは、私たちが真実の親のご存在とその親心を信じているからではないでしょうか。節に戸惑い、悩み苦しみながらも、一方では、きっと良いように導いてくださるに違いないと、親にすがり、もたれることができます。そして、おぢばに帰れば、いつでも親神様、そしてご存命の教祖が私たちを大きな親心で迎え入れてくださり、進むべき道を指し示してくださいます。この道の先人や私たちの親々も、そのようにして幾重の道も、親神様・教祖を頼りとして、勇んで通ってこられたと思うのです。

とありました。

このお話に涙し、大きな力を頂戴して帰島されました。その後も皆の真実の実動が続く中、本人から布教所長に電話がありました。それは、「退院できることになった。経過も良好で、転移もなく、腫瘍が小さくなっている。医者がこんなに薬が効く人はいないと言っていた。みんなのお陰だ。ありがとう」と、声も大きく勇んだ電話でした。12センチもあったかたまりの腫瘍はほとんどなくなり、レントゲン写真を見て、兄弟親族一同も親神様のお働きを強く感じた瞬間でした。

諭達に、

身上、事情で悩む人々には、親身に寄り添い、おつとめで治まりを願い、病む者にはおさづけを取り次ぎ、真にたすかる道があることを伝えよう。

とあります。身近な者の身上から関係する者一同が、何とか助かってもらいたいと、それぞれにできることを実行に「動いた」姿に親神様がお働きくだされ、この道に間違いないと真にたすかる道を確信したのです。

親孝心の道

この御教えを信仰する者は、自分の子供、孫へと信仰が繋がっていくことを望みます。なぜならこの道に繋がれば間違いないと信じているからではないでしょうか。

今年3月のことでした。東京のようぼくから娘の中席でおぢばに帰りますと嬉しい連絡がありました。ところがその別席中、特別老人施設に入所している母親の具合がよくないとの連絡を受け、別席後、親子はご本部神殿でお願いづとめを勤めました。

東京に戻ると母親は入院となり、

予断を許さない状況となりました。コロナの関係で、短い時間の面会しかできないことから、何とか残された期間は穏やかに自宅で看取りたいとの思いを手紙に綴り、教会に真実のお供えを運んでくださいました。教会でもお願いづとめを勤め、運ばせていただきました。すると数日後に自宅での看取りの許可もおり、その後約1カ月間穏やかに親子の時間を過ごすことができたとお礼の報告がありました。

元々は娘の別席のためにとおぢばへ帰っていたおかげで、おぢばで親のお願いづとめを勤めることができたこと、教会へ真実のおつくしを運ばれたこと、こうした親を思う心を親神様が受け取ってくださったのです。

論達に、

教祖お一人から始まったこの道を、先人はひながたを心の頼りとして懸命に通り、私たちへとつないで下さった。その信仰を受け継ぎ、親から子、子から孫へと引き継いでいく一歩一歩の積み重ねが、末代へと続く道となるのである。

とあります。この道は親孝心の道と言われます。子供に信仰の喜びを伝えていくために、まず自らが親に尽くす姿が、結果として子供へと繋がっていく、これが天然自然の理です。ようぼく一人ひとりの心の成人は、親の思いに一歩でも二歩でも近付く努力を、日々に積み重ねていくことです。

一人でも多くの人をこの道へ

来年、年祭活動2年目の目標として、大教会では、各教会が初席者を2名以上御守護いただこうと仰せくださいました。

ご本部秋季大祭において真柱様は、

一人でも多くの人を、この道に引き寄せさせていただく努力とともに、その人たちが道具衆の自覚を持って、教えを実行するようになるまで辛抱強く心を掛けていくこと

の大切さを仰せくださいました。

おふでさきに、

一寸はなし神の心のせきこみハよふぼくよせるもよふばかりを
三号　128

よふぼくも一寸の事でハないほどにをふくよふきがほしい事から
三号　130

この人をどふゆう事でまつならば一れつわがこたすけたいから
十三号　85

陽気ぐらし世界実現へ向けて、一人でも多くのようぼくが必要であり、いんねん寄せてこの道に導かれ、おぢばへと足を運んで別席を運ぶ中に心は澄み、たすかりたいとの心からたすかってもらいたいとの心へと変わっていく。そこにおさづけの理を頂戴し、ようぼくへと成人させていただくのです。

たん〳〵とよふぼくにてハこのよふをはしめたをやがみな入こむで
十五号　60

このよふをはじめたをやか入こめばどんな事をばするやしれんで
十五号　61

ようぼくが、身上で病む方のたすかりを願って真実心でおさづけを取り次ぎ、お願いづとめで真剣にお願いさせていただく心に、御存命の教祖が不思議なたすけをお見せくださいます。この度の年祭活動もできる者だけでなく、一人でも多くのようぼくが教祖の道具衆としての自覚をもっておたすけへと進んでいけるよう働き掛け、丹精に励ませていただきたいと思います。

◇　◇　◇

皆様方には今年一年、それぞれ精いっぱいに年祭活動に励んでこられたことと思います。教祖の親心にお応えしようとつとめながらも、さまざまお見せいただく節に心曇るときもあるかもしれません。しかし目の前にお見せいただく節は、これから先、必ず良き芽を出すための親心であることを信じ、親にもたれて、勇み心を頂戴して間違いなきこの道へと進ませていただきたいと存じます。

来る年祭活動2年目も親の声にお応えできるよう、一手一つにつとめてくださることをお願い申し上げ、神殿講話を終えさせていただきます。

（要旨）

十二月月次祭　祭典役割

祭主	大教会長	指図方	瀧本眞二郎
扈者	川畑澄博	賛者	河合善洋
扈者	山本義範	賛者	梶川芳征

	座りづとめ	前半	後半
てをどり	大教会長 奥田正德 岩切正教 会長夫人 前会長夫人 奥田富美子	奥田眞治 河端芳雄 石川健郎 望月恵美 宗我邦代 梶川りよ子	樋川泰士 岡本久昭 瀧本一太郎 梶川文子 竹内淳子 山本広子
地方	井筒文夫 井筒敏成 竹内義忠	山田道弘 吉田裕和 立花善文	今川聖一 川畑正博 瀧本亘
笛 ちゃんぽん 拍子木 太鼓 すりがね 小鼓	岩切正義 守田清一 湯川正圀 今川政治 岡島秀男 瀧本庄司	木村真次 中村俊和 葭内浩 西本義之 立花善三 浜田宣郎	新居里実 梶川芳男 西本興正 湯川正信 榎康紀 村田光伸
琴 三味線 胡弓	岡島きよの 今川和子 井筒ちぐさ	岩切孝子 松本さだえ 松森明美	奥田千晶 加世田陽子 湯川照代

献饌長　井筒文夫

伝供　奥田眞治　竹内義忠　瀧本庄司　中村俊和　樋川泰士　岡本久昭　花岡忠和　新居里実　西本興正　今川聖一　村田光伸　湯川正信　吉田裕樹　榎康紀　梶川和人　瀧本一太郎　望月慶太　宗我道明　松森誠太　橋爪徹弥　山本繁正　齊藤洋　榮安文　大西直喜

立教百八十七年　元旦祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様の果てしなき親心と御守護により、茲に芽出度く立教百八十七年の新春を迎えさせて頂き、一同慎んで寿ぎと共に御礼申し上げます。

顧みますれば過ぎし一年、教祖百四十年祭活動の歩み出しに当たって、コロナ禍で滞っておりました動きを始動させるべく、届かぬながらもたすけ一条の歩みを進め、心の成人に努めてまいりましたが、遅々たる歩みの中を、大いなる親心にお抱え頂き、数々の御守護を賜りまして、恙無く結構にお連れ通り頂きましたことは、誠に有難く勿体無い極みでございます。

元旦に当たり、言改めて御厚恩を御礼申し上げ、併せて今年も変わりなきお導きを御願い申し上げたいと、只今から役目にあずかる者一同、勇み心を揃え、今年の初づとめを陽気に勤めて、元旦祭を執り行わせて頂きます。

御前には年の明けるのを待ちかねて参らせて頂きました芦津に繋がる道の子供達が、共にお歌を唱和して、恙なき一年の御守護を願い一層の成人をお誓い申し上げる真心の状を御照覧下さいまして、親神様にもお勇み下さいますよう御願い申し上げます。

私共をはじめ、芦津に繋がる教会長、ようぼく一同は、改まる年と共に決意も新たに一層の成人を求めて、にをいがけ・おたすけに、修理丹精に根気よく取り組ませて頂いて、をやの思いにお応えできるよう、たすけ一条に一手一つに勇んで動き働かせて頂く決心でございます。

何卒この心定めを大らかな御心にお受け取り下さいまして、今年も一年、温かき親心と自由自在の理にお護り下さいまして、たすけ一条の御守護と喜びに溢れる時旬の道の歩みをお連れ通り下さいますよう、年の初めの御礼に併せ、一同と共に慎んで御願い申し上げます。

《特別企画》青年会ひのきしん隊結成70周年

ひのきしん隊は若者が成長する場所

井筒敏成　×　竹内義忠

青年会芦津分会委員長
青年会ひのきしん隊副班長

大教会役員・稗島分教会長
元・青年会芦津分会委員長

聞き手 // 編集部
写真提供　青年会本部

おやさとやかたの建設に若い力を結集しようと、昭和29年1月、青年会ひのきしん隊が結成された。以来、若者にとってのぢばへの伏せ込みの場、修練道場としての役割を果たしている。

本年、結成より70周年を迎えるにあたり、ひのきしん隊についての思いを語っていただき、多くの若者の入隊の後押しとしたい。

入隊のきっかけ

――お二人が初めて入隊されたときのことをお聞かせください。

竹内　初めて入隊したのが確か21歳のとき。4月1日が入隊の日で、4月1日まで働いていたので、2日に遅れて入ったんです。おぢばの学校も来てなかったし、ほとんど初めてのおぢばで、しかも団体生活でしょ。それでみんなより一日後で入隊したので、顔も分からないし、ただ部屋に連れて行かれて。それで最初に、今の島原の会長さんが話しかけてくれて、そこから2人でずっといるようになって、そこからだんだんみんなと打ち解けました。

入隊のきっかけは、仕事を辞めて道一条になりますってなったとき、当時の稗島分会の委員長さんから声をかけてもらったと思う。「4月からひのきしん隊っていうのがあるから、どうですか?」って。だから、私にとってお道の活動のデビューというか、最初の一歩がひのきしん隊でした。だから、ひのきしん隊があって、今の自分があると思っています。

それから青年会をずっとやってきた中で、本部の講習会とか研修会とかの合宿は大嫌いで、でもひのきしん隊だけは十数回入隊しましたけど、不思議と一度も嫌と思わなかったですね。

井筒　私が初めて入隊したのは部員で世話班としてでした。4年前、コロナウイルスが蔓延してきて、3月から入隊が中止になったんですけど、その直前の2月でした。

何も知らないまま、しかも世話班として行ったんですが、最初は「軍隊みたいなことするんやな」と。それに隊員さんの世話取りもあって、怪我をさせられないし、バスの免許を持ってたんで、運転せいって言われたけど、4年ぐらい運転してなくて。だから、最初はとにかくがむしゃらにやってた、というイメージが強いですね。しかも世話班で僕が一番年下やったんで、いろいろと大変でした。

竹内　私も部員になったときは22歳だったんで、その当時は一番若い者が第1班の班付世話班って決まってたから、毎回1班の

班付の世話班でした。それで、23日の夜に世話班の反省会があって、そこに当時の青年会長様（現真柱様）がお越しになるんですよ。で、最初に1班の班付から反省を言うんですが、会長様の前で最初に発言するっていうのが一番嫌でした。何を言っていいのかわからないし、緊張するし。

――前青年会長様は、真柱におなりになってからも入隊式、解隊式で直接お言葉を下さいましたが、世話班の反省会にまでお出ましがあったんですか。それだけひのきしん隊に強い思いをかけてくださっていたんですね。

50周年の思い出

――20年前にひのきしん隊が結成50周年を迎えたとき、竹内先生は芦津分会委員長として、どんな思いでしたか。

竹内　あの年は50名の入隊心定めをしたんですが、当時の状況ではかなり難しかったんです。前の年が15人、その前年が19人かな。心定めも達成できてなかった（※10教会につき1名の割り当てのため、当時芦津分会は毎年24名の心定め）ので、「とにかく、なんとかして50名を」という思いで、直属に巡回に行ってお願いをしました。

結局その年は、2回に分けて50名を達成したんですが、全教的に入隊者が多くて、100人以上で入隊した分会もありましたね。百母屋も毎月200人以上が入隊して、4階まですべて埋まって、講堂もパンパンになってました。朝、出動前に全員が整列した様子は本当に壮観でした。

それで、ひのきしん隊で思い出すのは、夕方、第一食堂から歌を歌いながら行進して百母屋へ戻るんですが、あれが最初はこっ恥ずかしかったんです。でも最後の方は、あれがものすごく印象に残りました。夕陽に照らされて、12個班が3つぐらいに分かれて行進していくんですが、それがすごい印象に残っています。

――今は歌を歌いながら行進はしていないんですね。

井筒　コロナになってから、飛沫が飛ぶからという理由でなくなりました。だから、入隊式のあと、今は歌唱指導もないんです。

竹内　入隊式の日に規律訓練ってあったでしょう。私の父（※竹内忠彦・稗島分教会前会長。昭和43年から3年間、ひのきしん隊副班長を務めた）が百母屋で務めているときに、規律訓練の担当やったので、自衛隊に行って教えてもらって、それをひのきしん隊に導入したらしいです。私も最初に入隊したとき「なんや、これ。軍隊みたいやな。これって必要なんかな」って思ってましたけど、やっぱり大人数の人に同時に動いてもらおうと思うと、ある程度の規律は必要ですね。規律訓練をするからみんな行進もちゃんとするし、24日間勤まるもんね。

1日だけでも入隊できる

――現在と20年前とはいろいろな点で変化していることもあると思いますが、現在のひのきしん隊の体制について、説明いただけますか。

井筒　これまで通り、当番月の1日から24日までの二十四日隊はそのままありますが、今はそこに加えて、好きな期間で入隊できるシステムになっています。

今は働いている会員さんも多くて、やはり24日間丸々休みを取ることが難しいので、会社の休みを利用して1日だけとか3日だけ入隊、ということができるようになっています。希望する分会は、百母屋で24日間寝泊まりすることもできますし、詰所から通いでも大丈夫です。ですから、自分会が入隊している月なら「明日急に仕事が休みになったから、入隊しよう」という入隊の仕方もできます。

――今は「家族入隊」というのもあるんですよね。

井筒　はい、２年前から始まったのですが、青年会員だけじゃなくて、奥さんや子供も一緒にひのきしん隊に入隊できるようになりました。

実際女の人は、ひのきしん隊ってどんなところか分からないですよね。旦那さんが入隊してても、どんなところで何をしているのか、想像できないと思うんです。なので、一日だけですが一緒に入隊してひのきしんをすることで、ひのきしん隊のことを知ってもらえると、これから安心して送り出すことにも繋がるし、子供たちも連れて、家族揃っておぢばに伏せ込む絶好の機会にもなる。そういうことで、ひのきしん隊にもバリエーションが生まれています。

ただ、家族入隊は分会の担当月のうち、１日限定なので、年に１度しかチャンスがないんです。芦津分会でも昨年、一昨年と家族入隊に大勢参加してもらいましたが、家族入隊に力を入れている分会もあって、20家族ぐらい入隊してきたりします。

あと、結成70周年記念として「ＦＬＡＴ入隊」を企画しています。立場や年齢が近い会員同士で入隊できるもので、「教会後継者コース」「学生層コース」の２つがあります。日程はあらかじめ決まっていますが、直属の入隊月に関係なく入隊できます。

――入隊しやすい体制になると、その日によって隊員数が大きく変動するわけですから、副班長としてひのきしん隊を運営する側にすれば、大変じゃないですか。

井筒　一応、事前の申し込みをしていただくことになっていますが、突然「その日に10人」とかになると、現場であったりバスの手配であったり、いろいろ大変です。でも基本的にはその日に飛び入りでも、ひのきしん隊ではすべて受け入れる態勢を取っています。

竹内　こうやって３日でも１日でも、フリーで入れるってなると、思いのある人間としては行きたいと思いますよね。だから、そういう思い入れのある人間を増やしていきたいですね。

――今は主にどんな現場でひのきしんをされているんですか。

井筒　今はお節会会場の設営・撤収と、11月末に青年会総会があったので後夜祭の撤収、旧青年会本部の解体作業が中心です。

他にも大裏（本部の農地）での農作業もあって、芦津分会が初めて家族入隊をしたときは６月でしたので、田植えをしました。

竹内「ひのきしん隊は、24日間合宿でないと意味がない」とか、形にこだわっていたら、ひのきしん隊はなくなってしまうかもしれない。思い入れのある人も大勢いると思うけど、今の時流に乗っていく部分も必要だと思います。

ひのきしん隊は「おぢばに若者が伏せ込む機会」という点が一番大事なんだから、今の入隊しやすい取り組みは、私はいいと思いますよ。それこそ「日は短くても、若い人がおぢばにしっかりと伏せ込む機会」ということを芯に据えてたら、それでいいんじゃないかな。

――教祖八十年祭の頃から「３日隊」が始まったり、おやさとやかた普請中は、24日以降に１週間の特別隊があったり、形はいろいろありましたが、「おぢばに若者が伏せ込む機会」という点は変わっていない。そこが大切なんですね。

成人に必要な人を引き寄せる

――入隊された中で、お手本になるような方はいらっしゃいましたか。

竹内　部員さんや委員さんで、一生懸命伏せ込んでいる方がいましたね。若い人の中には、朝づとめをこっそりサボったりする人もいたけど、空いた時間に回廊拭きをされたり、昼の休憩時間にゴミ拾いをされたり、お願いづとめに行ったり、そういう姿を見て、「これじゃあかんねんな」っていう

のを若い頃に教えてもらいました。その後、青年会本部の委員になったときに、「自分も手本になるように務めさしてもらわなあかんな」と思ってやってました。

それから、百母屋では他の分会との交流があるでしょう。そこで「すごいなあ」って話はよく聞きました。夜、飲んでる席でないと出ないような話もあるから、青年会が百母屋という場所を与えていただいているのは貴重なことで、おぢばで伏せ込む醍醐味を味わえる場所と思います。そこでいろんな話をして、たくさんの教友ができた。

特に私はおぢばの学校に来たことがなかったんで、お道の中での交友関係が全くなかったけど、実行部員の3年間で教友ができたのが、お道を通る上で本当に大きな宝になりました。一緒に入隊していた人の中には、今は大教会長さんになってる方もいるし、各大教会で中心となっているような人ばっかりで、私が委員長になってからも、芦津分会をどうしていこうか悩んでるとき、アドバイスをくれるような方が世話班にいたり、自分が成長できる人と必ず出会うことができる場所ですね。

当時のひのきしん隊には喧嘩っ早い人や、精神の身上の方も多く入隊されていて、「2日か3日で辞めるんちゃうか」っていうような方もいた。でも、後で聞くと「あいつのおかげでこの班がまとまった。みんな一つになった」とかね。だから、やっぱり神様は成人に必要な人をちゃんとおぢばに引き寄せてくださっていると思いますね。

――二代真柱様は、ひのきしん隊のことを「常時の後継者講習会」と仰せくださっていましたが、青年会にとっては本当に貴重な成人の場、成長できる場ですね。

多くの経験を積んでほしい

――今年ひのきしん隊が70周年を迎えます。若い人への期待を聞かせてください。

竹内　確かに昔と形は変わってるけども、青年会員にはやっぱりひのきしん隊に1回

昭和29年　宿舎である教館前に整列

昭和30年　おやさとやかた第1期工事

昭和39年　おやさとふしん道具・資材お供え行進

東西礼拝場の普請では主力として活躍した

でも多く参加してほしい。ひのきしん隊に来ないことには分からないこともあるし、おぢばに来て生活している中で、「おぢばってすごいな」って実感することがきっとあると思う。

　私が世話班をしているときに、ある大教会がおぢばで３日間のひのきしんに来られていて、ひのきしん隊と同じ現場になったんですが、そこから来てた若い子がひのきしんもしないで遊んでいて、作業の邪魔ばっかりしてたんです。それでひのきしん隊の隊員さんが注意したらその子が逆上して、大喧嘩になった。こちらは大人やから治めたけど、でも男の子は治まらなくて、詰所へ帰ってからも大暴れしてたらしいです。それで、夕方から夜にかけて、その詰所からひのきしん隊に苦情の電話が何回もかかってきた。そこの分会委員長からも文句の電話がかかってきた。こちらに非はないので、ひのきしん隊は毅然と対応していたんですけど、その日の夜、その詰所の風呂でボヤ騒ぎがあって、翌日の朝一番に大教会長さんと役員先生７、８人が揃って「申し訳ございませんでした」って、百母屋にお詫びに来られたんです。

　それを間近に見てて、「おぢばがしてくださっていることにたてついたり、理不尽に文句を言ったりしてはならんのやな」って、おぢばのすごさを、若いながらも感じさせてもらったことがありました。

井筒　これは私個人の話ですが、副班長になってから、作業中にハンマーで指を挟んでしまい、３日ほど血が止まらなかったことがあったんです。指先だったので、日常生活やひのきしんにも支障が出たし、今でも指を曲げると少し違和感が残っています。

　でも、指を見るたびに、日常生活が普通に送れていること、かしもの・かりもののありがたさを思い返すことができる。これを感じられるのもおぢばで務めさせていただいているからこそ、だと思っています。

竹内　ひのきしん隊でないと経験できないことってあると思う。そういう経験を一つでも積んでいくことが、これからお道を歩んでいく上で本当にプラスになってくる。それもできるだけ若いうちがいいと思う。

　それと、教会長さんにご協力をいただけるようにしないと、なかなか入隊者は増えない。会議で「今年は70周年です」って伝えても情報として流れるだけのことが多いし、未だに昔のまま、ひのきしん隊は24日間の合宿と思っている会長さんもいるかもしれない。今は新しい形でやってることもアピールした方がいいと思う。

　一番いいのは委員さんの巡回ですね。私が委員長の頃も何度も巡回に行かせてもらったけど、直属巡回で月次祭に行って、直接みんなの前で話して知ってもらうのがいいと思いますね。

　巡回は若い委員にとって、ものすごく勉強になるし、自分が言ったからにはやらないといけないし、自分の分会から人も出さないといけなくなる。責任が出てくると気持ちも入ってくるし、思いも強くなる。いい経験になると思います。

　青年会の間は失敗してもいいんですよ。私も芦津の委員になって初めての巡回のときは、自分でも何を言うてるのか分からんような状態で話をしてました。でもそういう失敗の経験が、今の自分の下地になっていると思う。だから若い委員にそういう経験をさせてあげるのもいいと思いますよ。

――敏成さんは、この旬にひのきしん隊副班長というお立場を頂戴されています。

井筒　70周年という旬に副班長を務めることに、ありがたいという気持ちと不安とが入り混じっていましたが、務めている中でありがたい気持ちが大きくなってきました。

　ひのきしん隊には、身上の方や気性の荒い方など、いろいろな方が来られます。僕自身も伏せ込みの中で、いろいろな隊員さ

んとのひのきしんや対話を通して、ほこりの心遣いを減らし、誠の行いを増やして、心を澄ます毎日を送れるよう努力したいと思います。

――最後に、芦津分会委員長としての意気込みを聞かせてください。

井筒　私としては、本当に一人でも多くの青年会員にひのきしん隊に入隊してもらいたい、という思いでいっぱいです。

三代真柱様が、「おぢばでの伏せ込みを通して心のふしんをする」とよく仰せくださったのですが、青年会ひのきしん隊はまさに、「心のふしん」「心の成人」をする場所です。青年会本部は「心を澄ます毎日を。」という基本方針を掲げていますが、ひのきしん隊への入隊が、日常生活の中で少しでも心が澄んでいくきっかけ作りの場にしてもらえたらと思います。

今年も芦津分会は9月に入隊しますが、ひのきしん隊では人との繋がりができる。他の分会の方との繋がりもそうですし、芦津分会の中でも深め合って、信仰の話とか、自分の将来のことを話せる機会にしたい。大教会の仲間として、将来を見据えた人間関係をもっと深めて、築いていきたい。僕もまだ喋ったことのない会員さんもたくさんいるし、もっとコミュニケーションを取りたいと思います。そうした中で、会員一人ひとりがより魅力的な人間になって、その魅力が周りに伝わるよう、教会になくてはならない存在になって、各教会の推進力となれるような分会を目指しています。

青年会は、道の上ではまだまだ未熟な存在です。でもそこが強みだと思うんです。最初から完璧を求めなくていい。活動していく中で見えてくるものが必ずあるので、失敗を恐れず、何事にも勇み心と情熱を持って挑戦していきたい。そのためにも、この70周年をチャンスと捉え、おぢばで伏せ込みと理づくりをし、をやの息をかけていただくいい機会にしたいと思います。

――ありがとうございました。

ひのきしんを終え、百母屋へ行進して帰隊

第百母屋での夜の挨拶　てをどりまなび

50周年では芦津分会から50名が入隊

２年前から始まった家族入隊　大裏での田植え

喜びの奉告祭

神殿落成奉告祭

天津分教会

12月10日、天津分教会（瀧本亘会長・京都市伏見区）は、大教会長夫妻をお迎えして、神殿落成奉告祭を執り行った。随行は井筒文夫役員。

天津分教会は、明治17年山城伏見眞明組講社を結成し、明治27年に教会設置後、大正4年に現在地に移転した。それから108年にわたって京都伏見の地を中心に教えを広めてきたが、このたび建物の老朽化に伴い、代々続いたこの地での神殿建築となった。

9日には、親神様、教祖を新しい神床にお鎮まりいただき、奉告祭当日を迎えた。

午前11時、瀧本会長の祭文奏上に続いて、大教会長が挨拶。「教祖の教えを実践して、理想の教会として胸が張れる教会に一歩一歩近づけていただきたい」と期待を述べられ、「皆が心を寄せ合って、先人の丹精を忘れず、しっかりと新しい教会で信仰心を養って、まずは教祖百四十年祭に向けて時旬の歩みを進めていただきたい」と促された。

おつとめの後、挨拶に立った瀧本会長は、「多くの人が集い、活気溢れる教会になるよう、教会内容の充実を目指して勤めます」と決意を述べた。

会食では、笑配師・花吹雪紫音のマジックショーなどで盛り上がり、真新しい神殿に笑顔と歓声が広がった。

芦津分会役立ち隊

青年会芦津分会（井筒敏成委員長）は、天津分教会（京都市伏見区）から依頼され、12月3日に会員3名がひのきしんに出動した。

依頼内容は、道路から教会玄関までの砕石を転圧機で固めて、緩やかな坂道を作る作業。寒さに負けず、勇み心をもってひのきしんにとりかかり、わずか1日で完成。教会家族に大変喜ばれ、充実した初出動となった。

今後も、芦津に繋がる教会に喜んでいただくために、青年会の若い力が役立つよう、活動していきたい。

餅つきひのきしん

12月27日、詰所で餅つきひのきしんが行われ、大人64名、子供37名、計101名が参加した。

今年は詰所からの声掛けにより、例年以上に家族ぐるみでのひのきしんが大幅に増え、多くの家族が、前日から詰所に宿泊。ひのきしん者は老若男女問わず、朝早くからガレージや食堂に分かれて、ひのきしんに勤しんだ。

午前8時より、1つが1斗の鏡餅を17個つき上げ、30日にご本部へお供え。神殿に運び込まれた鏡餅は、上段の四隅に積み上げられた。

正月三が日にお供えされた鏡餅は1月4日の「鏡開き」で切り分けられ、おさがりとして5日からの「お節会」で帰参者にふるまわれた。

天理高校ラグビー部 大教会を宿舎に全国大会へ

天理高校ラグビー部は、年末より花園ラグビー場で開催された全国高校ラグビー大会に奈良県代表として出場。1、2回戦を勝ち上がり、元日の3回戦に進出したが、接戦の末、惜敗した。体格は小さいながらも、果敢なタックルで相手を止める天理らしいラグビーで花園を沸かせた。

大教会は、12月25日より大会中の宿舎として、選手、スタッフら45名を受け入れ、世話取りにあたった。期間中は、大教会在住者が、専属の栄養士の指示によるメニューをもとに食事の準備を行うなど、精いっぱいの心を尽くした。

立教187年　元旦祭

1月1日、立教187年の新春を迎え、元旦祭が執行された。

午前零時、年が明けると同時に大教会長が開扉を行い、続いて献饌。午前1時より厳かに祭儀式が行われ、大教会長が祭文を奏上した。その中で「一層の成人を求めて、にをいがけ・おたすけに、修理、丹精に根気よく取り組ませて頂く」と新年にあたっての決意を述べられた。

座りづとめ、十二下りの陽気てをどりを勤めた後、大教会長が参拝者に対し、新年の挨拶。「昨年よりも少しでも成人させていただくことを、お互いの年頭の心定めとしたい」とした上で、年祭活動2年目の目標「1教会につき初席者2名以上の御守護を」が実現するために、「御恩報じの心で、にをいがけ・おたすけに、修理丹精に、そして伏せ込みと理づくりに励む一年としたい」と、新しい年の抱負を述べられた。

部内一斉巡教

（3月～6月実施）

巡教員、巡教先は次の通り。

大教会長＝海南・大関門・南向・脇町・島新・輝浪・和草・周宝

井筒文夫＝矢部川・鶴洋・鳥栖・苅田町・芦門

湯川正圀＝吹田・昭心・順世・和阪

瀧本眞二郎＝畦川・紀内・芦玉・芦山都

岩切正教＝明慈・明高・青港・東淀川

川畑澄博＝福田荘・上池・白地・北地

奥田眞治＝東向・畫間・井内谷・西浜

竹内義忠＝東祖谷・祖谷川・善徳・津阪・本伊丹

山本義範＝神輝誠・津雲・津浪・日名南

山田道弘＝東大木・二名・丸芳・笠戸・笠松

加世田洋＝島浜・島原港・東大屋・芦島鶴・島大

岩切正義＝三好・上郡・徳三・福・薩洲

瀧本庄司＝徳修・日台・加津佐・末宝・島長

吉田裕和＝芦名・山城谷・徳上・御谷

梶川和隆＝渭山・春日出町・昭大・紀志

立花善三＝日幡・紀船・今津原・大清

西本義之＝北勝・芦勝・東倶・惠庭・太美

葭内　浩＝芦船・脇西・高清・東脇町・鷺洲

浜田宣郎＝泉砂川・紀南・真大奄・鎭恵

木村真次＝東布施・照南・南国・芦出水・鎮名

中村俊和＝東天童・紀野本・津泉・東鎮・芦美屋

石川健郎＝東迎・豊崎・富島・津勝

樋川泰士＝芦名眞・吹櫻・西ノ庄・吉池・本京櫻

奥田正儀＝加島港・海部川・白野江・神甲

河合善洋＝有家・大正町・島百合・芦眞勇

今川聖一＝岩野邊・芦日眞・浪華浦・琉宮・芦沖

川畑正博＝上有明・毛見・大玉・甲山・四ツ海

梶川和人＝奄美笠・大朝・芦広・芦大熊・美和名

榎　康紀＝津阪部・理風・大眞永・真大富

榎理惠子＝立治・稲津・眞一

望月恵美＝大笠利・芦南・名瀬港・芦金久

宗我邦代＝大棚・大崎原・大屋仁・大仲町

岩切孝子＝芦姫・小松ケ原・玉成

加世田陽子＝冷水・有田港・畦浜

青年会ひのきしん隊

結成70周年記念！ Flat入隊

芦津分会の入隊月は9月ですが、Flat入隊は、入隊月に関係なく、個人で入隊ができます。

○教会長後継者コース

23～31歳の教会長後継者

①5/4～5/5　②7/13～7/14　③11/9～11/10

32歳～40歳の教会長後継者

①3/16～3/17　②6/15～6/16　③9/7～9/8

○学生層コース（19歳～22歳）

①8/8～8/9　②8/17～8/18

③9/5～9/6　④9/14～9/15

詳細は青年会芦津分会までお問い合わせください

教務部報

教養掛（12月）
教養掛主任
井筒　文夫
教養掛
奥田　正儀・谷上　行夫

教人登録
村山　浩子（東大屋）
立教186年12月５日

修養科第988期修了
永石もも子（島　原）
畠山　由羅（芦　玉）
立教186年12月27日

おさづけの理拝戴《11月》
藤本　豊子（四ツ山）
杉下　大海（北　地）
小早川一月（名瀬港）
山下あやめ（芦山都）
山下　朝陽（芦山都）
〈拝戴日順　５名〉

初席《11月》
〈３名〉鳥栖
〈２名〉名瀬港
〈１名〉芦明徳、高清、芦大熊
〈順序運びより　８名〉

年祭活動２年目の目標

１教会につき初席者２名以上の御守護を

《別席強調月間》

4月、5月、9月、10月

一人でも多くの方をおぢばへお連れして別席を運んでいただこう。

あしつスプリングフェスタ

3/27 ～ 30　―春の若年層育成強調期間―

27 水　**HAPPY 徒歩団参**　～帰ろう　おぢばへ～
【対象】中学生から25歳まで
【内容】詳細については、今後お知らせします。

28 木　**春の学生おぢばがえり**　～次代を担う　ようぼくへ～
【内容】午前10時より式典【本部中庭】
午後から直属アワー【詰所】

29 金～30 朝　**わかぎの集い**　～繋がろう　同世代の仲間と～
【対象】所属教会に繋がる中学生
【内容】午前10時開講【大教会】
おつとめ練習　お楽しみ行事など

30 土　**第52回少年会芦津団総会**
【内容】午前10時開会【大教会】
おつとめ（８交替）　総会式典　成人門出式
お楽しみ行事　お供え作品展

月例統計（自令和５年１月１日～至令和５年11月30日）

項目 / 名称（）内教会数	初席	のお理さ拝づ戴け	修養科修了	教人
大教会（1）	10	10	3	
靱（13）	2		1	
東津（23）		1	1	2
吉野川（29）	4	2	2	
島原（16）	7	2	1	2
日方（15）	3	1	2	4
稗島（7）	4			
本津（2）				
日高（2）				
姶良（5）				
津和（12）	3			
門司（6）	6	2		2
當別（6）				
大島（26）	20	7	4	
沖縄（3）	1			
尼崎（2）				
四ツ山（5）		1	1	
大冠（2）				
島下（1）	1			
天保山（3）				
青木（1）				
芦浪（1）	1			
甲邊（1）		1		
芦華（1）				
天津（1）				
入江（1）				
豊野（1）		1		
紀周（3）	2	2		
勝明（1）				
神の島（1）	1			
兵庫眞洲（1）				
芦ノ郷（2）	4			
本明勇（2）	2			
明道（1）				
芦東（1）				
和鎮（3）	2	2		
神滝本（1）				
芦明徳（1）	1	1		
真明彰化（2）	7	3		1
本氣（2）	1			
芦明照（1）				
真伯（1）	1			
合計（209）	83	36	15	11